

創刊号に寄せて

二松学舎大学長 今西 幹一

二松学舎大学（以下「本学」）は、明治十年に漢学塾・二松学舎として発足しました。明年、平成十九年は創設百三十周年を迎えることになります。その後、専門学校を経て新制大学の一に数えられるようになりましたが、その間「国漢」の二松学舎として揺るぎない学統を有し、これを誇りとして参りました。「国漢」は対立概念としてではなく、「国」もまた日本古典の教育研究を旨としていましたから、その間に径庭の隔たりのない一体化したものであったと思います。いわゆる「東方」の学としての意識はあったものの、日中古典を基軸に、人格陶冶、ひいては国家社会の秩序維持のための経略に繋がる才覚の形成に欠かせない学として見据えられていたものと思います。本学は長く国文学・中国文学の二学科よりなる文学部単一学部で過ぎて参りましたが、平成三年には国際政治経済学部を設置しました（現在はいずれも大学院研究科を設置）。国際政治経済学部は、当初は汎世界的な国際政治経済学の教育研究を自論んでいましたが、経年とともに東アジアの政治経済に重点を置くようにシフトあるいはスタンスを変えて参っております。これも先の「学統」からのおのずからなる収斂かと思われまます。

本学が平成十四年度に、「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」において、文部科学省から二十一世紀COEプログラムの一として採択、指定されましたのも如上の本学の発足と沿革からして至極自然な結果に思えます。五年間に亙るプログラム・プランなので、本年はその三年目、中間点にあると言えます。

これまで、内外の研究者の、汎世界的な結集、協同の組織化を図り、また若手研究者の育成にあたって参りました。また、

国内外の大学・図書館・研究機関の「日本漢文学」に関わる文献資料類の所在を確かめネット化し、文献資料の蒐集にも力を傾けて参りました。さらに、「日本漢文学」に関わる国際シンポジウム、公開講座・講演を開催し、定期的に研究従事者の研究成果の報告会を催しても参りました。加えて、昨今のわが国の教育、研究の世界における漢文・漢文学の衰退気味な状況を踏まえ、中国古典の教育の場、社会での賦活を図るべく、平成十七年度に大学主催で論語の第一回のシンポジウムを開き、側面より支援を図って参りました。幸いこれらの研究・調査は着実に成果を上げて来ており、また諸行事の反響も大きなものがありました。これらを通して日本漢文学研究の基盤を強化し、まこと「世界的拠点の構築」が成されつつあるものと思えます。

如上の経過、成果を踏まえて、当初計画どおり研究機関誌『日本漢文学研究』の創刊に至りました。これによりスタッフ個々の研究・調査の成果の文献への定着が計られ、真の公表が可能になります。更に情報として蓄積し、その偉業の共用が可能になります。また日本漢文学研究の活動・動向の彙報の役目を果たすことになります。そしてCOEの重要な使命である、次代の研究後継者の登龍門として研究成果の発表の場としての役割を果たし得るものと確信する次第です。

創刊号には、日本漢文学研究の論稿七本を初め、研究ノート、資料紹介・学界の動向の報告類、書評等の稿六本を掲げ、分厚なものになりました。倍多の投稿が集まり厳正な審査の上での採用となりました。採否に関わらず玉稿を寄せていただいた各位に対して感謝し、また本学COEスタッフの尽力に対して慰労の意を表します。この『日本漢文学研究』の発刊が本学COEプログラムの推進に大いに力を付与してくれるとしても、プログラムそのものはやっと軌道に乗ったばかり、気を引き締めて取り組んで行く所存です。また号を重ねるごとに『日本漢文学研究』の充実して行くことを期する次第です。

ひとしなみに漢字文化圏と言いますが、公用字の簡体字化、あるいはハンガルの採用など、国によってはそのあり様に大きな変容が生じております。古典漢籍の受容、撰取に断絶も生じかねない状況です。そうした中、わが国は、漢字を基に二種の仮名を創出し和文表記の方法を見いだし、また独自の漢字文献の訓読を開拓し、徳川幕府治下の泰平の世に藩幕合わ

せて儒学を中核に独自の漢学を築き上げて参りました。国学（日本学）、蘭学と合わせて、競合融和しながらのものであります。「日本漢文学」の「日本」は狭域化するものでなく、漢文学そのものを示唆するものと思えます。私事になりますが、昨年十一月、錦繡の韓国で開かれた韓国日本語文化学会に講演に参りました。学会場となりました大学の門前、校庭が親子連れで非常に混雑し、通り抜けるのに難儀を来しました。何事かと聞くと、漢字検定の試験があるとのこと。年々人気を博し、受験者がそれこそ右肩上りに加増しているとのこと。国粹的にハングル絶対の韓国でのこの実状。近代の合理主義のなかで、あるいは文字の機器への適用の上で疎外されていた漢字が、機器の電子化に伴い表記、印字が容易になり、あるいはその文字記号としての識別性で優位になり、時にその芸術性において、完全な復権は無理として、見直されつつあることは事実です。本学の日本漢文学研究の可能性について思いをさまざまにするものであります。